

# 情報化社会の時間管理

## ～ホワイトカラーの働き方・休み方～

社会経済生産性本部余暇創研研究主幹 丁野 朗

### ■工業化社会の時間秩序■

私たちが生きている近現代は、国・地域によって多少の違いはあるものの、歴史的には、まだ日の浅い特殊な社会である。日本では、近世末まで長く続いた不定時法から、太陽暦（定時法）に変わったのは1873（明治6）年であり、日本と世界の時刻が連動する標準時の導入は1888（明治21）年のことである。

不定時法の時間秩序は、太陽や月・星など自然の営みに沿っていた。それぞれの地域が太陽の「南中」をもって正午としたので、全ての地域が独自の時間を刻んでいた。

しかし、世界貿易の拡大と鉄道の普及が、時の「世界標準化」を大きく進めた。こうして機械時計によって計られる正確で一律の時間秩序を持つ近現代の時間が生まれたのである。

機械時計による人工の時間は、私たちの働き方を大きく変えた。工場やオフィスでは、一律の勤務時間による規則正しい時間が設定された。これは労働だけではなく「余暇」でも同じである。時計のベルとともに一斉に就業することの裏返しとして、私たちは一斉に余暇をとるようになった。9時から5時、月曜日から金曜日の労働時間の裏返しだが、余暇ラッシュを生んだのである。

一律の時間秩序は、労働の「質」の均質化も進めた。一定時間にどれだけアウトプットできるかが問われるようになった。労働は、投

入された労働時間の量によって評価され、8時間の労働投入が8時間分の成果を生むといった前提が築かれたのである。その時間は、基本的に会社側、つまり経営者によって管理されていた。

### ■情報化社会の

#### ワーク&ライフルール■

ところが、1980年前後から進んだ情報化・サービス化の進展は、それまでの労働秩序を大きく変えはじめた。いまや労働力構成は管理労働（いわゆるホワイトカラー）やサービス労働が主流を占めている。サービス就労では、全員が同じ場所で一律・一斉に働くことは効率の低下をもたらすばかりか、そもそも不可能である。ホワイトカラーの職場でも、一人一人がパソコンに向かい、異なる時間を過ごしている。まさに、現代は情報によって創造される多様な時間秩序が支配しはじめている。生産と労働が同時に発生するのがサービス労働の特色だが、情報化社会では、コンピュータ上のバーチャルな空間で好きな時間に商いが行われる。

こうして情報化社会では、個々人が一見、パーソナルな時間を持って労働に従事しているように見える。また社会の標準時間と自分の時間が共存する、新しい「不定時法」が支配しているようにも見える。このような時代の労働評価の基準は、投入した時間量ではなく、個々人のアウトプット（成果）で計られる。時間の管理者は経営者



ではなく、個々人である。つまり一人一人が時間を創造し、演出するプロデューサーであるかのようだ。

と、ここまで書いてきたが、こうした情報化社会の時間秩序は残念ながらフィクションである。それは、情報化社会に求められる働き方が可能となるような社会や企業のルールが未整備で、何よりも社会環境と私たちの意識に大きなギャップがあるからである。裁量労働は、情報化社会の新しい働き方として注目されたが、その結果が長時間労働やサービス労働の温床となっている。他人と自分の休日が異なることは情報化社会では当たり前だが、自分ひとり異なる休日は依然後ろめたい。

つまり、社会環境の変化にも係わらず、社会のルールや私たちの意識は、未だに前の時代そのままである。新しいワークルールやライフスタイルの創造は難しく、現状ではむしろ逆行すらしているように見える。だからこそ、そろそろチャレンジの時でもある。